研究ノート

ヘンリー・フィールディングの演劇作品 1728-1731

澤　田　孝　史

東京国際大学論叢　人文・社会学研究　第 8 号　抜刷
2023 年（令和 5 年）3 月 20 日

研究ノート

ヘンリー・フィールディングの演劇作品 1728-1731

澤　田　孝　史

Henry Fielding's Plays 1728-1731

SAWADA, Takashi

Abstract

This research paper focuses on Henry Fielding's Plays between 1728 and 1731(*Love in Several Masques, The Temple Beau, The Author's Farce, Tom Thumb, The Coffee-House Politician, The Tragedy of Tragedies, The Letter-Writers*). The purpose of this research paper is to show outlines, stage histories, criticisms and impressions of these plays.

キーワード：ヘンリー・フィールディング，劇作，上演，諷刺，大成功

目　次

はじめに
1. 『仮面越しの恋』
2. 『テンプル法学院の気取った男』
3. 『作家を中心とする茶番劇；とロンドンの娯楽』
4. 『親指トム』
5. 『コーヒーハウスで政治の話をする男；もしくは，自分で仕掛けた罠にかかった判事』
6. 『悲劇の中の悲劇；偉大なる親指トムの生涯と死』
7. 『手紙を書いた人たち：妻を外出させない新たな方法』
おわりに

はじめに

テキストはすべてWesleyan Editionの*HENRY FIELDING Plays Volume I, 1728-1731*（2004年）を使用した。この版の刊行により，フィールディングの演劇研究が可能になった。本研究ノートは，その第1歩として，各作品の概要とそれに対する筆者の意見をまとめたものである。なお，作品の背景や執筆・出版にかかわること，および上演史はこのテキストの*Introduction*による。また，実在の人物の生年没年についてはWikipediaを使用したものもある。各作品のタイトルは，テキストのタイトルページの表記に合わせた。

1.『仮面越しの恋』LOVE IN SEVERAL MASQUES

【執筆・上演などについて】

フィールディングの最初の劇作である。執筆時期はわからないが，1727年の1月から9月にかけてではないかと考えられている。

1728年1月13日にリハーサル中であることが新聞に載った。1728年1月15日の新聞に，明日ドルリーレーンで初演だと載ったが，実際に初演となったのは同年2月16日であり，その後2月17日，2月19日と2月20日の4回だけ上演された。シバー（Colley Cibber, 1671-1757），ウィルクス（Robert Wilks, 1665-1732）やアン・オールドフィールド（Anne Oldfield, 1683-1730）らが出演した。

この作品の脚本は1728年2月22日に発売の予告が新聞に載り，翌2月23日に出版された。何部印刷されたかはわからないが，少なからぬ在庫が生じ，第2版の出版には至らなかったようである。初版のミスを数カ所修正した版が出されている。

【あらすじ】

メアリー・ワートレー・モンタギュー夫人（Lady Mary Wortley Montagu, 1689-1762）への謝辞や「序文」において，モンタギュー夫人やシバー，ウィルクス，アン・オールドフィールドからの指導に対して礼を述べている。また大成功した作品の後であることや，ジョン・ゲイの『乞食オペラ』と同時期の上演という悪条件が重なっていることを述べている。「プロローグ」では，若者が世に出る作品なので温かく迎えて欲しいと述べている。

舞台はロンドンで，2日間の出来事である。

マルヴィルはヴァーミリアという恋人がいる，若くて真面目な男性である。メリタルは若く，女性を重んじる男性であり，ヘレナという恋人がいるが，マチリス夫人に好意を持っている。

マチリス夫人は若くて美しい未亡人である。彼女の親戚であるトラップ氏は，彼女と妻の言うなりではあるが，他の人には傲慢な人物である。ワイズモアは，マルヴィルとメリタルの友人で，ロンドンの虚栄や流行している娯楽などを嫌悪して田舎にいた哲学好きの男性である。

ラトルは，ワイズモア，マルヴィル，メリタルの友人で，恋に生きる男性であり，マチリス夫人を追いかけると述べるが，彼女の恋人はワイズモアであると知らされる。ラトルとメリタルは，恋人である女性には美が，妻には財産が重要であると述べるが，マルヴィルは，女性も男性を同じようにみていると述べる。

フォーマル卿は，女性の財産を重んじる人物である。

マチリス夫人の亡くなった夫は支配的であったようで，彼女はそこから自由になったことを喜

んでいる。彼女の友人のヴァーミリアは，真面目な人物である。

キャッチイットはヴァーミリア付きの女性である。彼女は，嫉妬深くなっているマルヴィルから，ヴァーミリアの恋人が自分以外にいるか教えたら褒美をくれると言われたので，褒美欲しさにそれはメリタルであると嘘をつく。

ヘレナはトラップ氏という年老いたおじの後見を受けている。彼は彼女を財産のあるエイピッシュと翌日の午前中に結婚させようとしている。彼女は真面目な人柄で，財産の無いメリタルと結婚したいと言って，エイピッシュとの結婚を拒み，結婚には男性の愛情より財産を重視するようにと言うトラップ氏の妻と対立する。

トラップ氏は，自分の家系を誇りにし，それを保つことを重んじ，結婚には愛情より身分や財産が重要で，女性の同意は不要だと考える。また彼は，女性は外出も娯楽もせず，朝から晩まで家のことをやるものだと考える，頑なで，常識に欠ける面がある人物である。彼の妻は，男嫌いという評判を保つことに力を注いでいるが，メリタルを愛していて，彼に近づくためにヘレナをだまして彼女の筆跡を手に入れる。

メリタルは，ヴァーミリアに対してはマルヴィルとうまくやるように，またマチリス夫人に対してはワイズモアとうまくやるようにと諭す。

ヴァーミリアはマルヴィルをひどくなじるが，それは彼が嫉妬しているせいであり，それは彼女も理解していた。マルヴィルはキャッチイットにメリタル宛の手紙を渡す。その手紙をキャッチイットは読んでしまう。マチリス夫人は，ヴァーミリアにマルヴィルとの結婚を勧めるが，その発言から彼女は寛大で温かい分別ある常識人であり，また女性同士の時と，自分に好意を寄せる男性が同席しているところでは主張を変えることのできる人物であることが示されている。

トラップ氏は，親戚であるマチリス夫人にヘレナを紹介する。マチリス夫人はフォーマル卿をトラップ氏に紹介するが，彼らは身分のことで言い争う。そこにワイズモアが来て，マチリス夫人と5ヶ月ぶりに再会し，求婚するが，簡単に溝は埋まらない。なぜ5ヶ月間離れていたのかについての説明はなされていない。

ワイズモアとヘレナが退室した後，マチリス夫人はエイピッシュに，ヘレナとの結婚を諦めさせようとしたところ，彼がマチリス夫人に求婚してしまい，彼女も少し慌てる。

キャッチイットがマルヴィルから預かったメリタル宛の手紙は，決闘の申し込みであった。キャッチイットがヴァーミリアにそれを見せ，このような事態になった経緯を，自分の企んだところを除いて白状する。それを聞いたマチリス夫人は，宛名をメリタルからワイズモアに変えることで良い方向にもっていこうとする。

トラップ氏の家では，彼の妻が暗がりでヘレナのふりをしてメリタルを待ち受け，近づくことに成功する。ここで彼女の好色さが示される。メリタルは自分宛にヘレナが書いてトラップ氏の妻が届けに来た手紙を信じて来た。そこにヘレナが来るがトラップ氏の妻に気づかれずにその場にとどまる。メリタルは自分の話している相手がトラップ氏の妻だと分かっていると彼女に告げ，ヘレナと結婚しようとしているのはその地所が目的であり，トラップ氏の妻を愛していると言う。そこにヘレナと剣を持ったトラップ氏が現れる。トラップ氏の妻はすかさず夫への愛を口にしてその場をごまかす。ヘレナはメリタルの不実を知ってしまった。

ワイズモアは，愛情を抑えるために哲学を学んだが，それが役に立たないで苦しんでいる。そこにマチリス夫人が密かに宛名を書き換えたマルヴィルからの決闘の申し込みが届く。ワイズモアは，どこかに行き違いがあると信じ，それを質すために出向くことにする。

決闘の場所では，マチリス夫人とヴァーミリアがいて，2人とも仮面をつけている。そこにワイ

ズモアが来て，マチリス夫人と言い争う。彼女は彼の本心を知り，仮面をつけたまま求婚するが，彼はそれを拒む。そこにマルヴィルが来る。彼と話をするためワイズモアはマチリス夫人と別の時刻に会う約束をする。マルヴィルは，自分には恋人がいるが，その不実を知ったと仮面をつけたヴァーミリアに言う。女性2人が去った後，ワイズモアはマルヴィルに，決闘を申し込んだ相手は自分とは別の人物ではないかと質す。その結果，マルヴィルは，キャッチイットが手紙に手を加えたことに気づき，事実をワイズモアに説明する。

ヘレナは，エイピッシュとの結婚に応じるとトラップ氏に伝える。彼はそのことをエイピッシュに伝えるが，エイピッシュはマチリス夫人との結婚を考え始めているので，ヘレナと結婚する気はなくなっていると伝える。

マチリス夫人への想いに悩んでいるワイズモアは，隠された（masqued）本心がわからないとメリタルに言う。メリタルは，その後エイピッシュから，マチリス夫人と近々結婚するのでヘレナとは結婚しないと聞かされたので，エイピッシュを翻意させ，自分が結婚式の牧師を務めると言う。

マチリス夫人とヴァーミリアは恋人とよりを戻すかどうかということを話し合う。

トラップ氏とヘレナが話をしているところにトラップ氏の妻が来たので，ヘレナは彼をクローゼットの中に入れる。ヘレナはトラップ氏の妻がメリタルと浮気をしているのを知っているので彼女に強気で話し合う。そこにエイピッシュと，牧師に変装したメリタルが来る。ヘレナはエイピッシュと結婚する気はないと言うが，彼は彼女と結婚する気で来ている。メリタルはヘレナと2人だけになった時，正体を示したので，彼女は自分が軽んじられたと思い，怒る。メリタルは，ヘレナからの手紙に書かれていた約束した場所に行ったらトラップ氏の妻が待ち受けていたと言って，その手紙を見せる。彼女は真相を知り，彼と仲直りをする。そこにクローゼットから全てを理解したトラップ氏が出てくる。

マルヴィルはキャッチイットに全ては露見したと言った上で，正直に話せば許すが嘘をついたら殺すと言って弁解の機会を与える。キャッチイットはマルヴィルにマチリス夫人から預かった手紙を渡し，マチリス夫人が近々フォーマル卿と結婚すると伝える。マルヴィルはその手紙をワイズモアに見せる。それは匿名で書かれており，自分の収入をワイズモアが受け入れてくれるのなら期待してくれ，私の求婚者は今日別の求婚者と結婚するとある。この手紙の差出人をマルヴィルはマチリス夫人と考えるが，ワイズモアは否定する。2人は一芝居打つことにする。

マチリス夫人はフォーマル卿の求婚に応じることを彼に伝える。それを聞いてラトルとエイピッシュは不満を述べる。そこにメリタルとヘレナが来て，結婚する手続きに入ることをマチリス夫人に伝える。そこに変装したワイズモアが来て，マチリス夫人の前の夫の相続人が権利を主張していると伝える。その内容を聞いてフォーマル卿とラトルとエイピッシュは，マチリス夫人との結婚の意思のないことを表明する。そこにマルヴィルが来て，ワイズモアが亡くなったとマチリス夫人に伝えると，彼女は失神するが，すぐ正気に戻り，ワイズモアを愛していたと述べる。それを聞いてワイズモアは変装を解き，彼女を許し，結婚することにする。マルヴィルは，ヴァーミリアを許し，2人は結婚することにする。

ワイズモアは，マチリス夫人と結婚してトラップ家と血縁になり，またヘレナと結婚するメリタルもトラップ家と血縁になる。

マチリス夫人が金銭目当ての結婚と愛に基づく結婚についての歌を歌い，その後ワイズモアが男女が長所をより伸ばすように心がけることが今後は大切だと述べる。

「エピローグ」は子役の女の子が行った。そこでは，批評家たちに，作者が若く，かつこの作品がその処女作なので厳しい言葉は抑えて，温かく迎えて欲しいと述べる。

【批評および感想】

フィールディングの野心が見られる，後の大作家となる片鱗が示された作品であると言える。

主要人物の登場から始まり，1人ずつ人物が加わり，それぞれの性格が示され，かつそれが時間軸に沿って進められているので，非常にわかりやすいといえる。

人間は，ある場面では気取ってみたり，またある場面では愚かであったりするものであるが，それを表現するには技量が必要である。この作品でも，登場してすぐに内面や人柄のわかる人物はほとんどおらず，長所・短所，常識的な面と非常識な面など様々な面を持たせており，フィールディングの才能がうかがえるが，それを描き分けるほどの技術に達しているとはいえないという印象がある。また，人間関係が複雑で分かりにくく，フィールディングの手に余っているという印象を受ける。

仮面をつけて話をしているという設定にもかかわらず，その正体が相手に分かっているとしか思えない箇所は技術不足といえるのではないかと思われる。

筋の展開の仕方は巧みで，人間への洞察力が示されていて，これは後年の作品と比べて劣っているとは思えない。ただこの面については，シバー，ウィルクス，オールドフィールドやモンタギュー夫人らの指導が入っているようにも思われる。

ロンドンの生活と田舎の生活の比較，出版業界や作家の生活，女性を軽んじる男の考え方，ロンドンの文化・流行，妻の尻にしかれる夫などへの諷刺から，フィールディングの作家としてのテーマが早くもこの時点で示されていると言えると思われる。

「プロローグ」と「エピローグ」からは，批評家からの厳しい言葉をかなり意識して，警戒している様子がうかがえる。

2.『テンプル法学院の気取った男』THE *TEMPLE BEAU*

【執筆・上演などについて】

この作品をフィールディングは，1729年4月にオランダのライデンを離れた後から執筆をし始めたと考えられている。フィールディングは当初この作品をドルリーレーンで上演してもらおうと原稿を持って行ったが，拒まれたために，グッドマンズフィールズに持って行ったと考えられている。1730年1月16日に，1月22日の初日に向けてリハーサル中であることが報じられているので，1729年12月には上演の告知ができるくらいには仕上がっていたと考えられている。

この作品は1730年1月26日にグッドマンズフィールズで初演となった。この日は大勢の客が来た。その後，1月27日，1月28日，1月29日，1月31日，2月2日，2月3日，2月4日，2月5日にも上演され，初日から9日間上演された。その後は同年2月10日，3月30日，6月5日，7月9日に，翌1731年には3月13日と12月4日に，1736年には3月25日と4月27日に上演された。1782年9月21日には改変されて上演された。なお，この劇場が上演した最初の新作がこの作品であった。

この作品の脚本は1730年1月24日に，来週出版されると広告が出て，2月2日に出版された。脚本には作者がMr. *FIELDING*. と，本名が記されている。

【あらすじ】

5幕物の喜劇である。

「プロローグ」はジェームズ・ラルフ（James Ralph, 1705-1762）が書き，ヘンリー・ジファード（Henry Giffard, 1694-1772）が読み上げた。

舞台はロンドンである。ルーシー夫人が自宅で姉妹のグレーヴリー夫人と口論しているところから芝居は始まる。このやりとりで，グレーヴリー夫人は淑女ぶっている人物であり，ルーシー夫人は陽気で浅薄な人物であることが示される。この姉妹は2人とも若く，ルーシー夫人はペダント卿の妻である。

ルーシー夫人には義理の息子ペダントがいる。彼は大学生で，学問の事しか頭にないが，その方面の能力は無い人物である。彼とルーシー夫人は仲が悪い。ペダント卿は拝金主義者で，南海泡沫事件で大きな損失を出した。彼は自分の兄弟の娘のベラリアと結婚させようと考えて，息子をロンドンに呼び出していた。

ベラリアは2万ポンドの財産を持っている。その父親が，少しの財産しかない田舎の男性と結婚させないようにするためにロンドンに来させていた。

ペダントは結婚を嫌がるが，ペダント卿は拒めば相続権を奪うと言う。ワイルディング卿が，ペダント卿を，ペダント卿の兄弟の手紙を持って訪ねてくる。その手紙には，これを持ってきた人物は自分の古くからの友人で，彼の息子をベラリアに紹介して欲しいとあった。これは，この人の息子とベラリアを結婚させて欲しいということである。ペダント卿は，ワイルディング卿とは初対面であったが，ワイルディング卿の息子は知っていた。

ペダント卿は息子に，ワイルディング卿の息子より先にベラリアに会わせると言い，息子もそれに応じる。

ワイルディング卿は，息子がテンプル法学院で6年間法律を勉強しており，そのために多額の仕送りをしていた。ワイルディングは父親を欺いており，全く勉強せずに，お金は女性や服などに浪費していた。

ヴァレンタインとヴァーモイルは大学時代の友人であった。ヴァーモイルは父親の相続権を弟に奪われていた。 ヴァレンタインは，陽気で女性に対してやや軽薄な人物である。ヴァーモイルは，翌日恋人のいるフランスに行く予定である。

ルーシー夫人とグレーヴリー夫人はヴァレンタインと親戚関係にあり，ワイルディングはこの2人の女性と親しい。

ワイルディング卿が息子の部屋を訪ね，召使いのピンセットに会う。そこでワイルディング卿は，息子のところに来た借金取りや愛人と出くわし，息子の金庫を開けて，息子に騙されていたことに気づく。

グレーヴリー夫人とルーシー夫人は，女性が結婚前に恋愛関係となることを良しとしないが，ベラリアは2人の親戚の女性に対し，それを良しとし，自分は父親の許しを得てから相手の男性を愛し，結婚する気になったと主張する，若い女性である。そこにヴァレンタインとヴァーモイルとワイルディングが加わる。ヴァレンタインは，そこにいたクラリッサと翌日結婚することになっていた。第2幕第11場でベラリアの結婚相手がヴァーモイルであり，彼は彼女がフランスにいると聞かされていたので翌日フランスに行くつもりであったことが明かされる。ヴァーモイルは自分たちの今後のことをヴァレンタインに相談することにする。しかし相談する前にヴァレンタインがベラリアを好きになっており，クラリッサとは別れ，ベラリアを相手の男性から奪うと言うのを聞いたヴァーモイルは，ヴァレンタインにベラリアの件を相談するのをやめる。このやりとりで，ヴァーモイルは徳と名誉を重んじるが，ヴァレンタインはそうでないという2人の違いが示される。

ワイルディングがグレーヴリー夫人を口説き，彼女はそれに応じる。しかしこれはワイルディングとルーシー夫人がたてた計略であり，この2人は不倫関係にあるが，ワイルディングは彼女も

欺いている。

ワイルディング卿は息子が自分を欺いていたと息子を怒る。しかしワイルディング卿は息子の説明を聞いて納得し，詫びて，ベラリアとの結婚を認める。しかしワイルディングは不倫については平然と父親を欺き続ける。そうとは知らないワイルディング卿は息子を責めたことで自己嫌悪になる。

ルーシー夫人は，ワイルディングより，ペダントを結婚相手にするようベラリアに勧める。ベラリアは，ペダントと話をして，会話がかみ合わない相手であると気づき，軽蔑する。ペダントは，ベラリアと結婚しろと父親から言われているがその気がないことをヴァーモイルとヴァレンタインに伝える。そこへワイルディングが来て，明日ベラリアと結婚するかもしれないと言う。ヴァーモイルとヴァレンタインは驚き，前者はそれはかなわないと思うと言う。

ワイルディングは，ペダントが友人から借りているテンプル法学院の部屋を午後借りることにする。

ベラリアは，ヴァレンタインのクラリッサへの言動について，クラリッサをなだめるように彼に言う。ベラリアと2人だけになったヴァーモイルは，自分たちの知らないところで次々に起こる出来事のせいで彼女に不信の念を抱き始めていたが，彼女と話をすることで誤解が無くなり，元の仲に戻った。

グレーヴリー夫人は，ベラリアとの結婚は考えるなとワイルディングに言う。彼がグレーヴリー夫人を寝室に連れ込もうとした時にワイルディング卿の声がしたので，グレーヴリー夫人はワイルディングを寝室に隠し，ワイルディング卿にワイルディングとベラリアが結婚すると自分との関係が終わるのでやめさせようとする。しかしワイルディング卿はベラリアの財産の事しか考えていないので，グレーヴリー夫人の説得に応じない。グレーヴリー夫人は悲嘆にくれるが，ルーシー夫人もワイルディングとベラリアの結婚を止めようとしていると知る。このあたりでグレーヴリー夫人は感情で動くことが多くなり，ルーシー夫人の方が理性に従って判断して行動するようになり，初めの頃の2人の性格が逆になったように思われる。ルーシー夫人はグレーヴリー夫人の寝室にあるリキュールが欲しいと言い，グレーヴリー夫人はドアを開けさせないように抵抗するが，ルーシー夫人が開けると，ワイルディングを見つける。ワイルディングは作り話でルーシー夫人の誤解を解くことに成功する。しかし彼女は，ワイルディングがベラリアと結婚しようとすることは許さないと言う。ペダント卿は，ヴァーモイルがベラリアの体を触っていたのを立ち聞きして怒り，ヴァレンタインにそのことを伝えるが，ヴァレンタインもそれを聞いて驚く。ペダント卿はヴァレンタインにヴァーモイルを我が家から追い出せと言う。ヴァレンタインは自分を裏切ったとヴァーモイルを責め，剣に手をかける。ヴァーモイルはヴァレンタインに，自分とベラリアの仲を説明し，彼女との結婚を諦めるようにと説得し，ヴァレンタインもそれを受け入れる。そしてヴァレンタインはクラリッサに詫びに行く。クラリッサは，はじめはヴァレンタインと結婚することには応じなかったが，結局は応じた。

ワイルディング親子が，ベラリアのところに来て，ワイルディング卿が，いつ結婚式を挙げるのかと彼女に確認をする。ベラリアは，その件は聞いていないと言う。ワイルディング卿は2人だけで話が出来るようにと，ベラリアとワイルディングだけにする。ベラリアはワイルディングを信用しておらず，軽蔑していることを伝えるが，ワイルディングはベラリアの美貌とお金が目当てなので諦めない。そこで彼は，ルーシー夫人とグレーヴリー夫人が鉢合わせするように仕組んで，一度に2人との関係を絶とうと考える。さらにワイルディングは召使いのピンセットに法律家のふりをさせて，父親に絞首刑になりそうだがお金を払えば絞首刑を免れるかもしれないと言わ

せる。ワイルディング卿は自分が絞首刑を免れるのに必要と思われる金額を10分の1に値切ろうとする。

ヴァレンタインは，ペダントがベラリアと結婚するのを嫌がっていることを知る。ルーシー夫人とグレーヴリー夫人は，ワイルディングが仕組んだとおり，ペダントの友人の部屋で鉢合わせとなり，お互い相手が来た理由を知り，ののしり合う。そこへ他の人が来たので，女性たちはクローゼットに隠れる。ヴァレンタインとヴァーモイルも来たが，争いになりルーシー夫人とグレーヴリー夫人はクローゼットから飛び出す。そこにペダント親子が合流する。そこでワイルディングはロンドン一の道楽者とされていることがワイルディング卿に伝えられ，父親は息子に激怒する。ピンセットの発言がワイルディング卿を怒らせ，2人がもみ合いになり，ピンセットのポケットから取り出された紙からヴァーモイルが，弟とピンセットの偽証と文書捏造によって，父親の財産相続権を奪われたことが発覚する。

ピンセットは，自分の正体と悪事が露見したので法廷に出てきちんと裁きを受けると述べたことで，ヴァーモイルは自分の財産が増えると信じ，ペダント卿に結婚を認めてくれるように求める。ヴァレンタインはヴァーモイルに詫び，ヴァーモイルもそれを受け入れる。またベラリアはクラリッサを説得してヴァレンタインとの結婚に応じさせる。ルーシー夫人とグレーヴリー夫人は，ワイルディングが自分たちを弄んでいたことを知り，絶交だと伝える。ベラリアの父親がロンドンに来たことが知らされ，彼が許すのならば結婚を認めるとペダント卿がヴァーモイルに言って終わる。

「エピローグ」は友人を称する者が書き，ジファードの妻が読み上げた。

【タイトルについて】

男性の登場人物の中でテンプル法学院にいるのは息子のワイルディングだけであり，彼が外見に凝っている事は示されているので彼が主人公と思われるかもしれない。だがこの作品は，ワイルディングが主人公といえる人物ではない。グッドマンズフィールズの役者の中心人物であるヘンリー・ジファードがワイルディングを演じているので，彼への敬意からフィールディングは作品の内容とは無関係にこのタイトルにしたのではないかと思われる。

【批評および感想】

初日から10日間以上上演されたという事は，悪い作品と判断されなかった証拠である。

この作品はベラリアをめぐる4人の男性たちの話だが，特に主人公もしくは中心人物と言える存在を設定しなかったため，軸のない作品になってしまい，当時の観客にも分かりにくかったのではないだろうか。もし中心人物というのであれば偽証と文書捏造によって奪われていた財産を取り戻し，かつ愛していた女性との結婚が叶うことになったヴァーモイルであろう。この筋に，ワイルディングとグレーヴリー夫人とルーシー夫人の三角関係の筋と，ベラリアと彼女の恋人であるヴァーモイルとヴァレンタインとワイルディングとペダントとの五角関係の筋が絡んでいる。この複雑な人間関係が唐突にワイルディングの意図と異なる展開となり，ベラリアはヴァーモイルと，ヴァレンタインはクラリッサと結婚することになり，アヴァリスの息子は大学に戻れることとなり，ワイルディングはルーシーとグレイヴァリィの姉妹に正体を知られ絶交を言い渡されるという勧善懲悪で大団円を迎える。争いのあった，もしくは欺きあった関係がそのままで終わってしまうのである。結末のつけ方がかなり強引であり，不自然といわれても仕方ないと思えるほどである。釈然としない印象が残る作品といっても良いのかもしれない。筋と人間関係を複雑

にしたため，この時点でのフィールディングの力量を超えてしまい，うまくまとめられなくなって，強引に結末に持っていったような感じがある。

第1幕には6場，第2幕には14場，第3幕には12場，第4幕には10場，第5幕には22場あり，頻繁に状況が入れ替わり，人物が出入りして，テンポが良いと言えば良いと言えるが，せわしなく，バタバタする感じを受けるとも言える。これが喜劇として成立しているのは，男性陣が恋する相手の女性の名前を口にしないからであり，そのために混乱が生じるのである。この点はフィールディングの巧みさが目立つ点である。なお，例外はアヴァリスの息子で，彼は結婚には無関心で，学問に没頭したいので，結婚を持ち出されて迷惑している。

ワイルディング卿はのちの『トム・ジョーンズ』（*Tom Jones*, 1749）のウェスタン氏を思わせる，子煩悩で，親ばかで，過干渉気味で，暴力的で，ロンドンを知らぬ田舎の男性だが，生き生きと描かれている。

フィールディングは，第2幕第11場でヴァーモイルとベラリアが2人だけになる場を設定する際に，不自然だと観客に思われないように細部に気を遣っているのがわかる。これは後の『ジョゼフ・アンドルーズ』（*Joseph Andrews*, 1742）につながるものと言える。

3.『作家を中心とする茶番劇；とロンドンの娯楽』THE AUTHOR's FARCE; AND THE *Pleasures of the Town* [1)]

【執筆・上演について】

フィールディングは1731年1月下旬から3月半ばにかけてこの作品を執筆したと考えられている。作中でコリー・シバーを取り上げているのは，1729年秋にドルリーレーンに渡した作品が拒まれたことに対するフィールディングの意趣返しと考えられている。フィールディングはこの作品で初めてScriblerus Secundus「第2のスクリブレルス」[2)] と名乗り，スウィフト（Jonathan Swift, 1667-1745）やポープ（Alexander Pope, 1688-1744）らと同じ執筆姿勢であることを示した。

1730年3月18日の新聞に広告が出て，この作品がリハーサル中であることが公になったが，題名が示されたのは同年3月23日で，人形劇があることも伝えられた。そして1730年3月30日にリトルヘイマーケットで上演された。次に4月1日に上演された後，7回上演された。人形劇の部分が演じられたのは4月20日であり，4月24日にはフィールディングの『親指トム』をアフターピースにして上演された。この組み合わせは大評判となり，皇太子を始め多くの上流の人々が見に来て，1730年7月3日までに計41回上演されるという大成功を収めた。ただこの大成功は『親指トム』による部分も少なくないと考えられている。さらにこの作品は，1730年10月21日から上演され，翌年6月18日までに計16回上演された。1732年には5月12日に上演された。1733年にドルリーレーンは役者側と経営者側で対立したため，5月末に閉じられた。ほとんどの役者たちはリトルヘイマーケットに移った。この時フィールディングは経営者側についた。

フィールディングがいつ決心したのかはわからないが，この作品に手を加えて上演することにした。そして1733年12月8日にその広告が出た。1734年1月8日にも広告が出た。そしてドルリーレーンで同年1月15日から1月21日までの間に6回上演されたが，計6回のみの上演であり，成功とは言えないとされる。なおこの時のヒロインのハリエットを演じたのはクライブ（Catherine Raftor Clive, 1711-1785）であった。

この作品の脚本は，初演の翌日の1730年3月31日に出版された。同年4月24日に，少なからぬ修正を施した第2版が出版された。さらに修正を加えた第3版が同年7月上旬に出版された。

1734年の上演の脚本は，初演の前後に出版されるとの広告が出ていたが，出版されたのは1750年であった。フィールディングは1750年の出版にはかかわっていないと考えられている。

【あらすじ】

本稿では，1730年版をもとにし，それと大きく異なる箇所のみ1734年版に言及していく。

「プロローグ」では，この作品はお客を笑わせるものであると述べている。1734年版では，ドルリーレーンはお客が来なくて寂れてしまったが，この作品を作者が加筆して再演するので楽しんでもらいたいと述べている。

第1幕

舞台は，ある部屋で始まる。大家である未亡人のマニウッドが家賃を滞納している売れない作家のラクリスにがみがみと催促をする。マニウッドの娘のハリエットは，ラクリスを愛しており，母をなだめる。マニウッドは娘とラクリスが付き合っているのを快く思っていない事をはっきりと口にする。そしてラクリスに出て行って欲しい旨を伝えるが，その後で彼への愛を打ち明ける。しかし彼はそれを拒む。ラクリスとハリエットは，彼女の母のいないところで結婚を誓う。なお1734年版では，ラクリスはハリエットに彼女の母から求愛されたがはっきりと拒まなかったことを伝えたため，ハリエットは怒るが，彼への愛が変わらないことも伝える。ラクリスの使用人のジャックが，原稿に色良い返事をもらえなかったことを伝えるが，これはコリー・シバー攻撃である。ラクリスの友人のウィットモアが来る。彼はオペラや中身のない作品や意味不明の催し物がもてはやされていることを嘆き，ラクリスに，もっとうまく立ち回ることを勧める。1734年版では，コリー・シバーの息子を表す人物が出てきて，ラクリスの原稿に手を入れると述べる一場があるが，これはコリー・シバーとその息子あげつらったものである。

ラクリスは芝居の脚本を本屋に渡し，50ギニーの前払いを求めるが，上演の決まっていない作品だという事とラクリスが有名でないという理由で拒まれる。ここで演じるための芝居と読むための芝居の違いについて，前者は役者の力量が，後者はウィットと中身が重要だという考えが示される。なおこの本屋は当時悪名高いカール（Edmund Curll, 1675-1747）という本屋を表す人物で，ラクリスに追い出される。

その後にマニウッドが来て，再度ラクリスに家賃を催促する。ラクリスが出かけた後，ウィットモアがラクリスの家賃をマニウッドに払う。お金を受け取った彼女は急にラクリスを誉め始める。ラクリスが戻った後ウィットモアが退出する。ラクリスはウィットモアがマニウッドにこれまでの家賃と今後3ヶ月分の家賃を払ってくれたことを彼女から聞かされる。

第2幕

舞台は居酒屋である。コリー・シバーとウィルクスを表す人物がラクリスの前で彼の脚本を検討し，大幅な書き換えを命じたが，ラクリスは応じず，物別れとなり，彼は退出する。なお1734年版では，ウィルクスを表す人物がコリー・シバーの息子を表す人物に変更された。またコリー・シバーを表す人物の芝居を見に来る客についての考え方が諷刺されているが，1734年版では，シバー親子が諷刺の対象になり，コリー・シバーの作品の作り方にまで及び，辛辣なものになっている。

舞台が先ほどの本屋の家となり，彼に雇われている作家たちが安い賃金で過酷な労働を指示され，それにいい加減な仕事で応じる様子が描かれる。ここでまともな考え方をする人物を登場させ，出版業界を諷刺させている。なお1734年版では消費税についての意見が加えられた。そこにラクリスが今晩上演する人形劇の脚本を持ってくる。本屋はそう聞いただけで契約を考え始める。

舞台は路上になり，ラクリスの人形劇の上演が宣伝され，人形劇は人間が演じることが伝えられる。そこで，その芝居のビラを持ったウィットモアとラクリスが出会う。ラクリスは上演に至る経過を話し，そのやり方を諷刺する。1734年版では，ウィットモアが退場した後，ハリエットが登場し，ラクリスのことを尋ねる人物が来たこと，そしてその人物がバントムという国のことを話したことを知らせ，またハリエットが仮面をつけて彼の人形劇に出ることも述べられる一場がある。

舞台はマニウッドの家となり，彼女はハリエットにラクリスとの関係を止めさせようとするが，ハリエットは応じず，彼が結婚の意思を示したことを母親に伝える。なお，1734年版では，この最後の場面は，路上のままである。

そこにジャックが登場して，ラクリスに会いたがっている人物が来たことを2人に伝える。なお1734年版では，ジャックが先ほど家に来た人物は大金持ちであり，ラクリスを探すのにお金を惜しまないことを伝えるが，そこで当時の選挙とお金の問題が諷刺される。

第3幕は1場だけしかなく，人形劇の体裁になっている。

ラクリスは進行役として舞台上にいて，舞台の上にいる役者と話をしたり，人物の設定や話の流れなどをお客に説明していく。プロットは阿呆の女神[3]がオペラ氏と恋に落ちることだとあらかじめ伝えられる。なお1734年版では，プロットはオペラ氏が阿呆の女神の桂冠詩人になることに変更されている。またラクリスが，この作品の舞台はあの世であり，登場するのは全員が幽霊であると説明する。なお1734年版ではドルリーレーンをめぐる騒動にも触れている。

役者たちは芝居だけでなく，歌と踊りもする。25の歌曲（=Air）があり，1734年版では24の歌曲がある。この歌曲については，1730年版にあって1734年版では削られた歌曲が2曲，1730年版に無くて1734年版に入れられた歌曲が1曲あるほかは，同じである。歌曲はこの作品のために書かれたと考えられるものが数曲あるのを除いては，同時期の作家が作ったものや，16世紀や17世紀に作られた作者不明のものを利用している。

はじめにパンチと妻のジョーンが出てきて，夫婦喧嘩をして退場する。なおこのジョーンは男性が演じている。次に三途の川の渡し守のカローンが登場し，詩人や墓荒らしと会話をするが，中身は様々な職業の諷刺である。なお1734年版ではここで当時の時事問題にも触れられている。次に悲劇作家，コリー・シバーを表す作家，ジョン・リッチ（John Rich, 1692-1761）を表すパントマイム氏，弁論家，オペラ氏，エライザ･ヘイウッド（Eliza Haywood, 1693?-1756）を表すノヴェル夫人，阿呆の首相としてカールを表す本屋が登場する。彼らは全員阿呆の宮殿を目指している。ここで阿呆の女神がオペラ氏と今晩結婚することが述べられる。そしてトランプのもたらす悪習について述べられるが，1734年版ではラクリスとパンチが弁護士などについての諷刺を行っている。ここで舞台が1度休憩となる。

休憩明けの舞台は阿呆の宮殿である。玉座には阿呆の女神がいる。パントマイム氏や悲劇作家，喜劇作家，弁論家が次々と登場し，ラクリスや女神とのやり取りで諷刺される。女神はオペラ氏に対して愛情を口にする。しかし彼女の娘であるノヴェル夫人が彼と前世で夫婦であったことを母に知らせる。ノヴェル夫人とオペラ氏はよりを戻す。それを見てラクリスは弁論家をけしかけ，女神に求愛させるが，女神は全く関心を示さない。パンチとラクリスのやりとりで，弁論家の話に中身の無いことが諷刺される。悲劇作家やオペラ氏，パントマイム氏が女神の桂冠詩人になろうとする。女神は喜劇作家の歌で寝てしまう。なお1734年版には，喜劇作家の歌で女神が寝る場面はなく，アグリィ伯爵が出てきて，オペラ氏を支持し，オペラ氏が桂冠詩人となる。そこにカローンが登場するが，ラクリスは進行役として，まだ出番では無いことを伝える。ここで巡査たちが登場し，

人形劇は中断される。彼らは女神を中傷したという理由でラクリスへの逮捕状を持ってきた。人形劇を中断させたことにノヴェル夫人が抗議すると，彼らは彼女の美しさに続行を認める。

ウィットモアとマニウッドとバントムの人が登場し，バントムの人によってラクリスがバントムの国王の息子であることが明かされる。そこにバントムの国王が亡くなった知らせが届き，ラクリスがバントムの国王となる。そしてハリエットは女王に，マニウッドは女王の母となる。そこへパンチが出てきて，マニウッドはオールド・ブレントフォードの女王で，ハリエットは王女であり，自分が彼女の兄であると伝え，マニウッドも自分の身分を認める。

エピローグ

4人の詩人が芝居の観客などについて話をしながらエピローグを作るが，まとまらない。そこにラクリスが作者として登場し，猫にエピローグをやらせると述べ，本物の猫を舞台にあげる。猫が退いた後，猫の格好した人間が登場し，猫と人間にまつわる話をする。1734年版には，もう1つエピローグがあり，そこでは，作家は1つの芝居には少なくとも2つのエピローグを書くと述べ，イタリアやフランスの作品にもイギリスの作品は対抗できるので，どうか楽しんで欲しいと述べられる。なお，1734年版には，作者不明という設定の，再演を賞賛する詩がある。この作者はフィールディング自身と考えられている。

【タイトルについて】

ラクリスという「作家」が「中心」の話で，しかも唐突にハッピーエンドを迎えるが，あまりに唐突で不自然な観があるため「茶番劇」とした。

【批評および感想】

第1幕と第2幕は1人の男性をめぐる母娘の恋愛の話や当時の作家の生活について描かれており，諷刺が効果をあげている。それが急に変わるのは第3幕である。場面があの世になり，幽霊たちが中心になり，当時の文芸が諷刺の対象になっているが，あまり堅苦しい話はなく，くだらない話が多くあり，やり取りが軽快で小気味よく，歌や踊りがあるので陽気な雰囲気になったのではないかと考えられる。ただ終わり方がいかにも唐突であると言える。ラクリスについては失った記憶が蘇ったという説明がされているので，自分が王の息子であったことを思い出すことに不自然さは無いが，マニウッドについては何の説明もなされていないので，不自然としか思えない。これが最後にあるため，それまでの話が諷刺してきたナンセンスに思われてしまう。そう思わせるためにフィールディングはわざとこの終わり方にしたのか，それとも観客に気持ちよく劇場から帰宅してもらうためにハッピーエンドにしたのかはわからない。

諷刺に意味がある作品であり，話の展開に特徴がある作品ではないと言える。時事的な諷刺が多くあるが，新聞などでそれを知っていないと楽しめない作品である。当時そういう情報を知っている人たちが見に来たと考えられ，この作品が人気になったという事は，新聞などがいろいろな層に広まっていた証拠と言えるのではないか。

1734年版では，話の流れがより自然に見えるようにとフィールディングが事前に布石を打っておくなど，工夫をしていることが見て取れる。

1734年版につけられた賞賛の詩はウォルポールに媚びるフィールディングの姿が感じられる。

4.『親指トム』*TOM THUMB*

【執筆・上演などについて】

この作品は『作家を中心とする茶番劇』のアフターピースとして執筆された。他の作品への言及などから，リトルヘイマーケットとのかかわりができてからの1730年4月の最初の2週間に執筆されたと考えられている。2幕12場からなる作品だが，1場が8行ほどのものが複数ある短い作品である。

1730年4月18日の新聞に，初めてこの作品のことが載った。そこには4月21日に『作家を中心とする茶番劇』のアフターピースとして上演され，作者がScriblerus Secundusであることが記されている。

『親指トム』は4月18日にリハーサルに入り，4月24日に『作家を中心とする茶番劇』のアフターピースとしてリトルヘイマーケットで初演となった。トムを演じたのは子役の女性であった。4月25日に2回目の上演が行われ，この日と5月14日には皇太子が見に来た。ウォルポールは3回見に来た。5月7日には2場加えられて上演された。『グラブ・ストリート・ジャーナル』（*The Grub-Street Journal*）は6月11日に，この作品が大成功であると認めた。6月22日までに34回上演された。7月2日に『レイプにつぐレイプ』と一緒に上演され，7月3日には『作家を中心とする茶番劇』と一緒に上演された。7月17日，7月18日，7月22日，7月23日，7月24日にはコリー・シバーの作品やパントマイムと一緒に上演された。『親指トム』は結局このシーズンには41回上演された。

9月4日と9月14日にはバーソロミュー市（いち）で上演された。

リトルヘイーマーケットの次のシーズンでは，10月23日，10月26日，11月11日に上演された。フィールディングが未承認の幕のついた『親指トム』が11月30日，12月4日，12月7日，12月14日，12月23日，12月30日に上演された。1731年には，1月14日と3月19日にも上演された。グッドマンズフィールズの劇団も3月15日，3月18日，3月20日，3月22日，3月27日に上演した。『親指トム』は，このシーズンには16回上演されたのである。しかし3月24日に『親指トム』の後継の『悲劇の中の悲劇』が上演されたので，これ以降18世紀の間は『親指トム』は上演されなかった。『親指トム』が上演されたのは11ヵ月間ということになる。

脚本の初版は，1730年4月24日か4月25日に出版されたが，作者名は記されていなかった。初版の第2刷は4月24日から5月7日の間に「序文」，「プロローグ」と「エピローグ」をつけて出版された。新たに2場追加され，語句などにも修正が加えられた第2版が5月7日と6月6日に出版された。5月7日に出版された方にフィールディングは修正を施した。1730年7月9日頃に第3版が出版された。1730年にはダブリン版も出版された。

【あらすじ】

舞台はアーサー王の宮廷である。巨人たちを殺したトムにアーサー王は褒美として，自分の娘ハンカマンカと結婚させることにする。トムはそれを聞いて大喜びする。トムに恋をしている女王はこの結婚を止めようと夫を説得するが，できない。この結婚を止めたいという女王の気持ちを知ったグリズル卿は，トムの出世を憎んでいるので，彼を殺すと言う。女王は，結婚を止めてくれれば良いのであって，トムを殺さないでくれと言う。女王はトムへの愛と道徳のどちらを重んじるか迷うが，トムを選ぶことにする。ここで登場人物の1人が執行吏に債務者勾留所に連れていかれそうになり，トムはその執行吏を殺す。ここで執行吏や，借金によって投獄される制度の問

題点が取り上げられる。

ハンカマンカは，トムを愛しているが，身分が違うことを悩んでいる。ハンカマンカの召使は，トムはおもちゃだの，実体がないなどと言うので，ハンカマンカは叱る。そこへアーサー王が来る。ハンカマンカは王に，夫が欲しいと言う。王は，それなら良い人物がいると言って，トムの名を出す。ハンカマンカは大喜びする。そこへトムが死んだという知らせが来る。その死因について2人の医師のやりとりが示されるが，2人ともやぶ医者であることが観客にわかるように描かれている。この後，トムは生きており，トムの服を着た猿が毒殺されたということがわかる。

アーサー王はトムとハンカマンカを結婚させることにして，恩赦を宣言する。しかしその後，トムが牛に飲み込まれてしまう。王は恩赦を取り消す。トムは霊になって，王達の前に現れる。するとトムを憎んでいたグリズル卿がトムを殺す。それを見たハンカマンカがグリズル卿を殺す。この後互いに殺し合い，最後に王が自殺し，全員の死体が舞台の上に残ったまま，終わる。

【批評および感想】

フィールディングは当時，チャップブックやおとぎ話で広く知られていたトムを用いて当時の世相を諷刺しようとしたと考えられている。

アーサー王に威厳は感じられず，感情的な振る舞いが目立つ。この芝居を見た観客には，トムについての知識があるという前提で書かれているため，女王のトムへの想いなどは説明が不足しているのか，当時誰もが知っていることなので説明がなされていないのかはわからない。ただ，こういった点は今日の読者にとってこの作品をわかりにくくさせているところであると言える。

当時の債務者拘留所や執行吏にかかわる問題や，やぶ医者について描かれているが，これらはこの後もフィールディングが何度も取り上げる問題である。

最後の場で主要な登場人物たちが突然互いに殺し合うという急展開で終わってしまい，なぜこのような結末になるのか，こうすべき理由があったのか理解できない。筆者には，どう評価して良いか分からない作品である。アフターピースとして，単なる埋め草として書いたように思われてならない。

5.『コーヒーハウスで政治の話をする男；もしくは，自分で仕掛けた罠にかかった判事』THE COFFEE-HOUSE *Politician;* OR, THE JUSTICE *Caught in his Own* Trap

【上演・執筆などについて】

この作品は『レイプにつぐレイプ；もしくは，自分で仕掛けた罠にかかった判事』（RAPE *upon* RAPE; OR, *The* JUSTICE *caught in his own* TRAP）として1730年6月15日に上演すると広告が出たが，上演2日前に役者の病気で延期された。同年6月20日に，6月23日に上演すると広告が出て，6月23日にリトルヘイマーケットで上演された。初演の6月23日を含め，6月24日，6月26日，6月30日，7月1日，7月2日，7月10日，7月21日の8晩上演された。なお，当初は7月3日に上演される予定であったが，役者の病気のために7月10日になった。

1730年11月30日にも上演された。これについては，11月28日に広告が出たが，そのタイトルは*The City Politician: or, The Justice Caught in his Own Trap*であった。このタイトルは上演時には*The Coffee-House Politician*になっていた。この上演にフィールディングは全くかかわっておらず，タイトルについても無関係であったようである。しかも，リトルヘイマーケットの役者たちはThe Battle of the Poetsという新しい幕を加えたが，フィールディングはこれに反対し，リト

ルヘイマーケットと袂を分かった。

そして1730年12月1日と12月3日と12月4日に広告が出たが，役者の病気で延期されて，12月4日にジョン・リッチのリンカーンズインフィールズで『コーヒーハウスで政治の話をする男；もしくは，自分で仕掛けた罠にかかった判事』のタイトルで上演された。12月4日，12月5日，12月7日と12月17日に上演された。このうちの最初の3日間の売り上げは3日目のベネフィットチケット分23ポンド5シリングを含むベネフィット54ポンド13シリングを入れて，176ポンド16シリングであった。12月17日の上演時の売り上げは28ポンド9シリングであった。この結果から，この作品は失敗とされる。その後は1959年にミュージカルとして330回上演され，1983年にも『レイプにつぐレイプ』のタイトルでニューヨークで20回上演された。

この作品は1729年9月24日のフランス皇太子の誕生に言及していることから，フィールディングは1729年9月ごろから構想を練り始めたと考えられている。他にも1729年11月9日のセビリャ条約や，1729年12月25日施行のジン法や1730年の陪審についての条例の制定など，はっきりと日付を特定できるものがあるので，フィールディングは1730年の1月から6月，特に5月に執筆を行ったと考えられている。

脚本については，初演当日に*Rape upon Rape*のタイトルで出版された。12月にリンカーンズインフィールズで上演された際は，*The Coffee-House Politician*のタイトルで出版された。これらにはタイトルページや配役一覧のほかにも細かい点で異なるいくつかの版がある。

【あらすじ】

第1幕

舞台はロンドンで，就寝しても良いような遅い時刻である。ヒラレットは自宅でコンスタンと結婚することについての不安を女中のクローリスに相談し，彼の誠意を信じると決め，不安を解消する。そこへヒラレットの父ポリティックが登場する。彼女は父親に，政治に熱中しないで自分の商売に目を向けて欲しいと言うが，父親は聞く耳を持たない。彼は新聞の記事にあおられ，外国の動向をひどく気にかけ，イギリスの将来について心配し，そのためさらに新聞から情報を得ようとしている。彼は，第5幕第3場によれば，少なくとも17紙（誌）読んでいる。近所に住む友人のダブルもポリティックと同様の人物であるが，ポリティックが国の大きさなどを正確に理解していないのに対し，ダブルは，そうしたことを正しく知った上で，より冷静で自分で物事を判断している。

ポリティックに，召使いのフェイスフルが，ヒラレットがクローリスと家出したことを伝えるが，ポリテックはそれに全く関心を示さず，またダブルもポリティックを咎めることなく，先ほどからの政治の話を続けようとする。フェイスフルが事の重大さを分からせようと懸命になった結果，ポリティックは調べる気になるが，それをダブルは，娘より社会のことが大切だと言ってたしなめる。

ソトモアとランブルが登場する。ソトモアは大の酒好きで，ランブルは女好きで，寝取られ男を増やすのが自分の仕事だと口にするような人物である。

ヒラレットは乱闘を目撃し，逃げる際に女の召使とはぐれたあと，コンスタンのもとへ行くところをランブルに見つけられ，捕まえられる。ヒラレットは，ランブルに見逃してくれと言うが拒まれる。ランブルは，ヒラレットをタバーンに連れて行き，抱きしめ，言うことを聞かないと強姦（ravish）すると言い，それを聞いたヒラレットは，「助けて，レイプよ，レイプ」と叫ぶ。スタッフが，レイプの現行犯でランブルを取り押さえる。ランブルは道を歩いている時，この女に襲われた

と言う。スタッフは，2人の主張が正反対なので，朝に取り調べるために2人とも連行する。この時点で客はランブルが平気でレイプをし，偽証もする悪党だという印象を持たされる。

第2幕

スクイーザムは賄賂を受け取り，法律を軽んじる腐敗した判事である。しかし彼は，妻の浪費を咎めようとしても，賄賂をもらっていることをばらすと脅され，それに屈するような，妻の尻に敷かれている人物でもある。スタッフが，スクイーザム夫妻のいるところにランブルとヒラレットを連れてくる。スクイーザムはスタッフの話からヒラレットを売春婦だと思い込んでいる。ヒラレットはランブルを訴えないと言う。スタッフが，目撃したと言ってもヒラレットは認めず，自分たち2人を釈放しないとスクイーザムを訴えると言う。ランブルはスクイーザムを罵る。スクイーザムはランブルに証拠がなくても死刑にしてやると言う。スクイーザムの妻も夫の考えを支持するが，ランブルに丁寧な態度で対応されたのを喜び，夫を責める。スクイーザムはヒラレットを2人きりで取り調べると言い，彼の妻はランブルを自分が預かると夫に言って，お茶に誘う。これはスクイーザム夫妻がそれぞれ浮気相手を見つけたので，それを実行に移したということである。

ヒラレットはスクイーザムが自分を売春婦だと思っていることに気づき，売春婦のふりをすることでことをうまく運ぼうと考える。スクイーザムは，彼女が自分の愛人になることに応じたと思った時，妻の足音が聞こえたので，後で会うことにして釈放した。

スクイーザムのところに彼の妻とランブルが戻ってくる。スクイーザム夫妻がランブルにお金を求めると，ランブルはお金を貸してくれと言う。1730年5月に，露骨に賄賂を求めると法に触れることになっていたので，さすがにそれには応じられないとスクイーザムは言う。夫がランブルが賄賂をくれれば彼を釈放するつもりでいるのに気づいた妻は，自分がランブルを説得してくると夫に告げる。このやりとりで彼女は夫を支える面があることが示される。また彼女は，夫がヒラレットを狙っていることに気づいているが，それは自分がランブルにしようとしているのと同じであることもわかっている。

第11場でワージィ判事の家にポリティックが娘の家出の件を伝えに来て，自分には2人の子がいたが，もう1人は絞首刑になったと言う。ワージィは，娘が結婚していたら認めてやれとポリティックに言うが，その時，例として外国の話を持ち出したため，ポリティックの頭はその国の話に夢中になってしまい，ワージィが娘の話に戻そうとするが戻らない。結局ポリテックはコーヒーハウスに行く時刻になったと言ってワージィと別れる。ワージィはポリティックが，政治の話に夢中になって娘のことを忘れることを嘆き，コーヒーハウスで政治を語る人間はドン・キホーテの類だと言う。

第3幕

路上でヒラレットは女の召使のクローリスと再会する。クローリスはコンスタンがレイプで逮捕され，スクイーザムが裁くとヒラレットに伝える。それを聞いたヒラレットはコンスタンを助けに行く。コンスタンは，レイプされそうになった女性を助けたら，その女性からレイプで訴えられたと独白をする。コンスタンを，もう1人レイプで捕まった男と一緒に居させるとスタッフは言う。その際スタッフは，「レイプと殺人は男が恥じる必要のないことであり，自分も昔やったことがある」と口にする。コンスタンのところに連れて来られたのは旧知のランブルで2人は再会を喜ぶ。ランブルは，コンスタンがレイプで逮捕されたと知る。コンスタンは，なぜランブルがインドから戻ってきたのか聞く。ランブルはインドで結婚したことを話したところにソトモアが来て，彼はコンスタンとも知り合いであったのでスタッフも交えて4人で談笑する。ランブルは妻を海で嵐で

失ったことをコンスタンに話す。そこにヒラレットが来て，まっしぐらにコンスタンの所へ駆け寄るが，ランブルは敵が来たと最初は思う。コンスタンは，やっていないレイプの罪をきせられている事をヒラレットに話す。コンスタンは，ヒラレットと約束した場所に行ったが，乱闘に巻き込まれたと言い，ヒラレットがその乱闘で自分は女の召使とはぐれたと言う。その後，事件が起こりそうだったのをランブルが助けてくれたと言う。このヒラレットの発言を聞いて，ランブルは自分がレイプしようとした女が友人の知り合いであることを知ると同時に，自分の行為を隠してくれることを知って安心する。ランブルは彼女に降りかかってきた件についてコンスタンに事実を偽って伝えるが，コンスタンはそれを信じ，ランブルに礼を言う。ここでランブルはスクイーザムの妻に呼び出される。彼女は自分の目的にランブルが気づいていないと知り，説明すると，彼はそれに応じる旨の発言をする。しかしそこに彼に会いにソトモアが来たので，彼女はランブルを釈放させると言って立ち去る。ソトモアとヒラレットのいるところで，コンスタンは釈放される方法を見つけたとランブルに言う。

第4幕

スクイーザムは書記のクイルに，妻に先に自分の不貞の証拠を見つけられると多額の金銭を要求されるので，妻の不貞の証拠を欲しいから協力してくれと言う。コンスタンは東インド会社を辞めてからのことやヒラレットと結婚するつもりであること，昨夜彼女と約束した場所に行くと，女性が襲われていたので助けると自分が捕まったこと，自分を訴えた女性は今日の午後出頭することなどをランブルに話す。ランブルは自分を勘当した父親と10年連絡を取っていないが，今なら許してくれると思うと言い，これまでのことを反省しているとコンスタンに話す。スクイーザムの妻からの手紙がランブルに届き，そこには彼が釈放されたことが書いてあった。第5場でヒラレットは，スクイーザムの呼び出しに応じて，行く。彼は大喜びで彼女に顔を叩いてもらったり，犬の真似をする。彼は，彼女を売春婦だと思っているので，売春婦になるまでの話をさせているうちに興奮して，彼女に襲いかかる。彼女は「助けて，レイプよ，レイプ」と叫ぶ。そこにソトモアが助けに駆けつける。彼女はソトモアに，スクイーザムを縛って，他の判事の前に出させてくれと言う。スクイーザムは，自分は罠にかけられたと言う。ヒラレットはスクイーザムが死刑になってほしいと言い，ソトモアもスクイーザムは死刑になると言う。スクイーザムが，何でもするから許してくれと言うので，ソトモアがヒラレットにとりなし，彼女は応じ，スクイーザムにコンスタンを釈放する書類を書かせる。しかしスクイーザムは，コンスタンとヒラレットとソトモアを訴えるとして巡査に連行させる。

第5幕

場面はポリテックの家になる。彼は娘の心配をしていたが，夕刊が来ると聞いて大喜びをして，娘のことを忘れてしまう。しかもそこへダブルが来て，政治の話をする。2人が話しているところへフェイスフルは，ヒラレットが逮捕されたことを伝えるが，邪魔をするなとポリティックに言われる。フェイスフルはヒラレットを助けに行くようにとポリティックを懸命に説得するが，ポリティックは慌てもせず，関心も示さない。フェイスフルはスクイーザムが悪党だと知っているので，ワージィのところに行くことを提案する。ダブルが，これと似たようなことを新聞で読んだことがあると言うのを聞いて，初めてポリテックは事態を認識し，ワージィのところに行くことにする。ここでポリティックは読んだことの方を信じるドン・キホーテ的人物であることが再度示される。

ワージィのところにスクイーザムが来て，自分を訴えた人間がいるので自分の味方をしてくれと言う。ワージィはきちんと裁くと言ってスクイーザムの願いをはねつける。ワージィのもとで

裁判が行われる。ヒラレットは事実をワージィに話す。スクイーザムは2人の人間に証言をさせる。そこでポリティックとフェイスフルとクローリスが来る。ポリティックはヒラレットを見て驚く。ワージィはポリティックを知っていて，ワージィは状況を説明し，ポリティックの言う通りにすると言う。ワージィは，ヒラレットがポリティックの娘だと知り驚く。そこにスクイーザムの妻が来て，夫の悪行をワージィに伝え，夫に訴えられた人たちは無実だと言う。ワージィはコンスタンが自分の妹イザベラを救ってくれた人であると確認する。またイザベラは，ランブルの妻であり，2人は再会を喜ぶ。またスクイーザムの証言をした2人は偽証するように雇われた人間であったことが明かされる。偽証した2人とスクイーザムは連行される。

ランブルはポリティックに，息子であると言う。ワージィはポリティクに，あなたの息子の妻は自分の妹であると言って喜ぶ。ランブルは父ポリティクに妹ヒラレットの幸せをかなえるよう，コンスタンとの結婚を認めてくれと言う。ポリテックはこの結婚を認め，ランブルの勘当も解く。

【批評および感想】

『レイプにつぐレイプ；もしくは，自分で仕掛けた罠にかかった判事』というタイトルであり，“a Rape, a Rape!”と叫ぶ場面がウェズリアン版では442ページと478ページの2カ所にあるが，これら2カ所とも助けを求める叫び声であり，訳すと「レイプよ，レイプ」となり，上記の「レイプにつぐレイプ」とは異なる状況を表している。しかも，作中レイプは全て実際には行われていない。したがって，このタイトルは，内容には合わないと言える。1730年2月にフランシス・チャータリス（1675-1732）は女の召使をレイプしたとして死刑を宣告されたが4月に恩赦となった。その陰にはウォルポールの存在があったと考えられて政治的な話題にもなり，人々の大きな関心を集めた。ただ，この事件と，この作品，特にそのタイトルにかかわりがあるとする人もいるが，はっきりした証拠は無いとされるが，このタイトルなら扇情的で時宜にかなっており，作中それに相当する場面がなくとも，客を呼ぶことができるとフィールディングが判断したのではないかと思われる。また，スタッフがレイプを行なった経験を話するところから，当時はこのタイトルでもそれほど扇情的とは受け取られていなかったのではないかとも思われる。フィールディングは上演する劇場を変えた際に，はっきりした理由は分かっていないがタイトルを『コーヒーハウスで政治の話をする男；もしくは，自分で仕掛けた罠にかかった判事』に変えたが，このタイトルは内容と異なっているということもなく，無難であると言える。フィールディングにとってタイトルはどちらでも構わなかったのではないかと思われる。

当時人々の関心の的であったフランス皇太子やヨーロッパの情勢はともかく，それ以外の個人名や法律についての知識がないとわからない作品と思える。つまり皮肉なことに，政治に詳しくないと，この作品を楽しめなかったのではないかと思われる。

ランブルは，最初は悪党としか思えなかったのがいつの間にか善人として示されてしまうことに不自然さが感じられる。ヒラレットがランブルの妹であることが最後になって明かされることも，またそれまでに2人とも兄妹であることに気づいていないことも不自然であると言える。ヒラレットがランブルを訴えなかった理由が示されない上に，ランブルが彼女をレイプしようとした件をごまかしてコンスタンに話す理由も示されていない。これらはフィールディングが，観客に，話を不自然だと受け取られることを意に介さずに進めているからではないかと思われる。フィールディングは，観客のことをあまり意識せずに執筆したのではないかと思われる。

作品を5幕物にするためレイプを主題とする話と政治好きの人物の話を，判事への諷刺を行うことで無理に合わせたように思える。第3幕第11場前後のスクイーザムの妻とランブルのやりと

りは，判事諷刺の面とも合わず，かさ増しのために書いたように思われ，中だるみを感じさせる。また同様にソトモアが酒を飲むことの素晴らしさを語るところが何度も描かれるが，過剰なように思われる。これらは当時の観客にも同じ印象を持たれたのではないかと思われる。一方，彼の，敵すらも過ちを認めれば友人としてともにお酒を飲む器の広い性格をうまく描けていると言える。

第3幕第8場でコンスタン，ランブル，ヒラレットが釈放され，観客は一件落着と思ったところに偽証する者が現れ，その後の展開に引きつけられるが，勧善懲悪の話としてハッピーエンドになるところはフィールディングの話の展開の巧みさが表れているといえる。

コンスタン，ランブル，ヒラレットとスクイーザム夫婦の部分が長く続くため，ポリティックの存在を忘れてしまいそうになる。この点はフィールディングの構成の未熟さといえるのではないか。

6.『悲劇の中の悲劇；偉大なる親指トムの生涯と死』THE **TRAGEDY** OF ***TRAGEDIES*;** OR THE **LIFE** *and* **DEATH** OF **TOM THUMB** *the Great*

【執筆・上演などについて】

この作品は，2幕12場476行であった『親指トム』[4] を3幕10場929行に伸ばしたものである。『親指トム』から大きく変わったのは，139の注と，195のドライデン（John Dryden, 1631-1700）を始めとする他の人物の引用などがなされたところである。

1731年2月12日にこの作品の上演の広告が出た。この作品は，『親指トム』の後，1730年5月以降に執筆が開始されたと考えられている。1731年3月24日にリトルヘイマーケットで初演（この日のアフターピースは『手紙を書いた人たち』であった）となり，この後，3月26日，3月29日，3月31日，4月2日，4月5日，4月7日，4月9日，4月22日，4月23日，4月26日，4月28日，5月10日，5月19日，6月18日まで計15回このシーズンに上演されたが，6月に政府によって止められた。1732年には，リトルヘイーマーケットでは，2月21日，3月8日，4月1日に，リンカンズインフィールズでは，5月2日，5月3日，5月4日，5月22日に，ドルリーレーンでは，5月3日，5月12日，5月25日に上演された。1733年には，5月3日にドルリーレーンで上演され，ダブリンでも上演された。その後1735年8月6日と9月2日に（なお，8月8日にも予定されていたが，観客が少ないため上演されなかった）リンカンズインフィールズで上演された。1735年12月3日と1736年5月3日にリトルヘイマーケットで上演された。その後4年間上演されなかったが，フィールディングの別の作品がヒットしたので，1740年にドルリーレーンで4月と5月に9回上演され，コヴェントガーデンでも3回上演された。1741年には6回，1745年には13回，1746年には7回上演された。その後3回上演されたというのがフィールディングの生前の記録である。

脚本は初演の日に出版された。1737年には初版に500もの修正が加えられた第2版とされる版が出た。なお，この修正にはフィールディングはほぼかかわっていないと考えられている。1751年には，さらに修正が加えられた第3版とされる版が出た。この作品のフランス語版は，1738年に出版された。

【あらすじ】

場所は，アーサー王の宮殿が中心であるが，トムと反乱軍との戦いの場面は平原とされる。

『親指トム』に，アーサー王がグランダルカを愛したり，王女のハンカマンカがトムとグリズル卿の両者と結婚の約束をしたり，ハンカマンカとグランダルカのトムをめぐる言い争いが加えら

れている。トムとグリズル卿がハンカマンカをめぐる言い争いの場面や，グリズル卿が反乱軍を率いて来るが，トムによって鎮圧され，首をはねられる場面や，魔法使いのマーリンが登場し，トムの出生について語る場面なども加えられている。なお，『親指トム』にはトムが死んだという情報が伝えられる場面があるが，この作品には無い。最後にアーサー王はトムとハンカマンカの結婚式を催すが，そこにトムが牛に飲まれてしまったことが伝わり，女王がそれを伝えた人物を殺すことから舞台の上で殺し合いが始まり，女王や王女やその女の召使などの主だった人物が死に，王が自殺する。舞台の上に全員の死体が残ったまま終わるのは『親指トム』と同じである。

【批評および感想】

『親指トム』を長くしたことにより，人間関係についてより詳しい説明がなされ，より自然なやり取りがなされていると思われるが，それでも広く知られた『親指トム』の話を知らない者にとっては分かりにくく，唐突な印象を与える場面も少なくないと思われる。

脚本の登場人物一覧には『親指トム』とは異なり，人間関係が詳細に記されているので，これを読んでいれば本編の内容がよくわかるが，読んでいないと，台詞の意図が非常にわかりにくいと言える。

この作品は『親指トム』と異なり，エピローグとプロローグがない。この作品の「序文」に，本編はエリザベス女王の時代に書かれたとあるので，脚本で作者と記されているH.Scriblerus Secundusは注を作った人物と言う設定であると考えられる。しかし，この設定も第1幕第3場の注の（*1*）が1724年の作品から写した台詞だとあるように，「序文」の設定と矛盾する箇所も見受けられる。

この作品では，執行吏らとトムたちとのやりとりは『親指トム』から大きく削減されているが，これは完全に削除しても問題ないと思われ，残した理由がわからない。また，『親指トム』にあったやぶ医者諷刺は削除された。この作品は筋自体よりも，そこにつけたドライデンを初めとする作家，批評家や歴史家などへの言及が効果をあげている作品である。フィールディングが23歳から24歳にかけての作品であり，彼の自己顕示欲が，その注の内容から感じられる。

この作品は，注が重きをなす作品なので，どのように上演されたのかが大きな問題である。しかしながら，十分に調べることができなかった。今後の課題としたい。

7.『手紙を書いた人たち：妻を外出させない新たな方法』THE LETTER-WRITERS: Or, a New Way to Keep *A* WIFE *at* HOME.[5)]

【執筆・上演などについて】

1730年9月にブリストルで，匿名で多額の金銭を要求し，応じなければ放火し，一族も一緒に殺すという脅迫状がある人物に届いた。この人物は金銭の要求に応じなかったため10月4日に仕事場が焼かれたが，本人と妹は逃げることができた。ロンドンでこの事件は10月8日に新聞で報じられた。その後模倣犯が増え，イギリス中で同様の脅迫状が届くようになったことが報じられ，人々を怯えさせた。フィールディングのまたいとこのレディー・ダイアナ・フィールディングが，1730年10月29日に同種の脅迫状を受け取ったことが大々的に報じられた。人々の恐怖は高まった。国王は1730年11月12日に，犯人を見つけたら褒美を与えること，脅迫に屈して金銭を払うことを禁じる声明を出した。報道は，11月半ばから12月半ばにかけて最高潮に達したが，1731年1月までにはかなり減り，その後はなくなった。

フィールディングは遅くとも10月8日にこの事件を知り，人々の関心をひいているこの事件を作品化しようと考えたようである。フィールディングは，1730年の11月と12月の新聞をもとに，1730年の11月半ばから1731年の2月半ばまで執筆していたと考えられている。1731年2月12日の新聞に，*A New Way to Keep a Wife at Home* という作品が，1731年3月初めには上演すると予告が出ていることから，この頃までにはかなり仕上がっていたと考えられている。

この作は，1731年3月24日水曜日にリトルヘイマーケットで『悲劇の中の悲劇』のアフターピースとして上演された。フィールディングのなじみの役者が演じた。3月26日と3月29日にも上演された。新聞の予告では3月30日もしくは3月31日まで上演の予定だったが，3月29日のアフターピースは『作家を中心とする茶番劇』となった。その後4月2日に上演された。フィールディングの死後，別の人が改訂した形で1783年9月17日と1785年1月20日に上演されたことはあったが，元の形でロンドンで上演されたのは1928年であった。

この作品の脚本は公演初日に出版された。フィールディングは著者として自分の名を出さず，Scriblerus Secundus とした。この版には多くの誤りがあったがなぜそのようなものが出版されたのかはわからないとされる。誤りは印刷作業によるものもあるが，原稿および校正作業によるもの，つまりフィールディングの責任もあると考えられている。1750年に第２版が出た。これは初版にあった多くのミスを改めているが，この作業にフィールディングがどのくらいかかわっていたかはわからない。

【あらすじ】

この作品は，3幕のファースで，プロローグもエピローグも無い。

舞台はロンドンで，冬のある日の夕方から翌日の午前中の話である。中心になるのはウィズダム夫妻とソフトリー夫妻である。この2組は，ともに夫は年寄りで，妻は若く，親戚の関係にある。この他に，ウィズダム夫妻とソフトリー夫妻の甥にあたるコモンズと，彼の友人であるレイカルが主な登場人物である。

この作品は，ウィズダム氏とソフトリー氏が妻を外出させたくないので前記の脅迫状の事件を利用した話が一方の流れであり，もう一方がウィズダム夫人とソフトリー夫人と彼女らと不倫関係にあるレイカルの話である。ウィズダム氏とソフトリー氏が互いに相手の妻に脅迫状を送った後から話は始まる。

ウィズダム夫人は，脅迫状が送られてきていて，しかも夫が要求されているお金を払わないため，怖くて外出できないので不倫相手のレイカルを家に呼ぶ。2人が会っている時にウィズダム氏が帰宅したため，レイカルはクローゼットに隠れる。レイカルがウィズダム氏やソフトリー氏に見つけられそうな機会が何度かあり，観客をはらはらさせる。ウィズダム夫人は何とかごまかしたが，ついにウィズダム氏がクローゼットを開けてしまい，中にいたレイカルはウィズダム氏に体当たりをして，顔を見られずに外へ出る。

ウィズダム家の召使がクローゼットの窓が壊されており，そこに人が入るのを見たと言う。レイカルは，自分の召使いのリスクに窓を壊させていた。それが見つかっても窓から入ったとなれば盗人と思われることはあっても，不倫相手と思われないのでウィズダム夫人の名誉を守れるとレイカルが考えたからであった。

レイカルはちょっとした行き違いから不倫相手のソフトリー夫人とうまくいかなくなっていたが，会って話をし，元の関係に戻る。そこにソフトリー氏が来たので，ソフトリー夫人は一芝居打ってレイカルを好ましい人物として夫に紹介する。彼女は脅迫状が届いても護衛を従え，武装

して外出する，勝ち気で大胆な女性である。そのため彼女を外出させないようにしようとする夫の計画がうまくいかない。ウィズダム氏は脅迫状によって妻を外出させないことに成功しているので，ソフトリー夫人が自分の妻に会うことを快く思わない。

ウィズダム夫人のところに再度レイカルは会いに来ていたが，そこにウィズダム夫人に脅迫状が届いたと聞いたソフトリー夫人が来る。ソフトリー夫人は，レイカルとウィズダム夫人の関係を知らない。レイカルはテーブルの下に隠れる。そこでクローゼットに入った者を召使いが見たと言ってきた。クローゼットが開けられ，盗みに入っていたリスクが見つかる。そしてテーブルをひっくり返されて，レイカルも見つかる。ウィズダム氏はレイカルが先ほど自分に体当たりした人物だと気づき，盗人だと思う。リスクはレイカルも盗みの共犯であり，彼が脅迫状を書いたと偽証をする。2人は治安官に留置所に連れて行かれる。

翌朝2人を判事であるウィズダム氏とソフトリー氏が裁く。その裁判にはウィズダム夫人とソフトリー夫人，コモンズも加わる。コモンズは，証拠とされた手紙に宛名がないことをうまく利用して彼女たちの不倫の件をごまかす。またウィズダム氏とソフトリー氏は，脅迫状を書いたのは筆跡から自分達であることを隠しきれなくなったので，白状し，妻たちに詫び，今後は外出することを止めないと言う。そしてすべてが丸くおさまって終わる。

【批評および感想】

ソフトリー夫人は，名前がルクリーシアであり，これは「貞節のかがみ」とされる人物の名前である。ソフトリー氏は妻の貞節を信じていたが，実際はそうではなかった。ウィズダム夫人はレイカルとの仲を夫に隠したり，脅迫状によって外に出るなと言う夫の意見に，ただ従っていたのが，自分で考えて行動する自立した人間に変わっていき，この話の軸になる人物と思われる。

ソフトリー夫人は勝気で夫を従わせているので，ソフトリーという名は妻の支配に甘んじている夫にふさわしく，ウィズダムの名は，狡猾な策を弄する夫よりも自分で成長していく妻にふさわしい名である。

この作品は背景となる事件から約3ヶ月経っていることと，前半で結末が予想できそうな話のために，観客の反応が良くなかったのではないかと思われる。しかしウィズダム夫人の内面が少しずつ成長していく様が丁寧に描かれており，フィールディングの人物描写の巧みさの片鱗が早くも現れていると言える。ウィズダム氏は，妻を外出させないことに成功して喜び，それをソフトリー氏にも自慢する。しかし妻は，外出はしないが愛人を家に呼んでいるのであり，ウィズダム氏は自分が出し抜かれているのに気づいていないところが笑いの対象となっている。ソフトリー氏は，妻を抑えられずに従う様がその老いた外見と合わせることで笑いの対象となったと思われる。

人々の言動の辻褄が合うようにフィールディングが神経を使っていることがうかがえ，この頃から不自然さを無くすことを彼が重んじていたことがわかる。しかし一方でなぜウィズダム氏とコモンズの仲が悪いのか説明が無いなど，未熟さによるのか，それとも推敲しなかったのかはわからないが，説明が不足しているとしか思えないところも少なくない作品である。

おわりに

今後はWesleyan Edition の分類に従い，フィールディングの1731年から1734年にかけての劇作と，1734年から1742年の劇作についても本研究ノートと同様の形でまとめていく予定である。

注

1）以下，『作家を中心とする茶番劇』と表記する。
2）この訳は福本宰之「*The Dunciad* に秘められた寓意について」『十八世紀イギリス文学研究』，雄松堂出版，1996年，206ページ，を使わせていただいた。
3）この名称は，2020年3月3日の時点で筆者がつけたものである。すでに他の研究者がこの名称を使用している場合は，参照を怠った筆者の責任である。
4）本稿の『親指トム』はすべてフィールディングの作品を指す。
5）このタイトルを日本語で表すとすれば，『手紙を書いた人たち，あるいは妻を外出させない新たな方法』になるのではないかと考えられる。しかし，この“Or”を「あるいは」と訳すのは，このOr以下がウィズダム氏とソフトリー氏が書いた脅迫状のことを言っていることと，その前にコロンがあることを考えると，無理がある。また，この“Or”を「すなわち」と訳すことは，この“Letter”には，ウィズダム氏とソフトリー氏が書いた脅迫状だけでなく，ウィズダム夫人とソフトリー夫人が愛人に宛てて書いた手紙も含まれると考えられるので，やはり無理がある。この“Or”は，これ以下が副題を示すためだけに用いられていると考えて，タイトルは『手紙を書いた人たち：妻を外出させない新たな方法』とするのが最も妥当ではないかと思われる。